

- 1 派遣期日 令和4年11月11日（金）～11月11日（金）
- 2 派遣先 学校名 埼玉県さいたま市立本太小学校
所在地 埼玉県さいたま市浦和区本太2-26-25
<https://motobuto-e.saitama-city.ed.jp/>
- 3 研修内容
 - (1) 授業参観・研究協議
 - ・4年1組 加藤靖子先生
主題名「みんなが気持ちよく生活するために C規則の尊重」
教材名「雨のバス停留所」
 - ・研究協議会
授業者反省、質疑応答、指導助言
 - (2) 課題別分科会
 - ・テーマ 『道徳科における指導の工夫』
 - ・提案者 神奈川県川崎市立はるひ野小学校 教諭 公文加菜先生
 - ・指導助言者 神奈川県川崎市玉川小学校 校長 辰口直美先生
 - (3) 講演
 - ・講師 文部科学省初等中朝教育局教育課程課 教科調査官 浅見哲也先生
 - ・演題 『子供一人一人の可能性を引き出す道徳教育』

4 感想

(1) 授業参観

4年1組、加藤靖子先生の授業を参観した。導入では、電子黒板を使用し、事前アンケートの結果と本時のめあてを確認した。本時で考えることを始めに提示することで、見通しをもつことができると感じた。また、本教材のあらすじも紹介しており、「早く読みたい」という声が聞こえ、子どもたちの意欲が高まっている様子が見られた。展開に入り、加藤先生の朗読が終わり、加藤先生が「どんなところが気になった？」「みんなで話し合いたいことは何？」と問いかけた。すると、ほとんどの子どもたちが手を挙げ、発言した。一人が発言すると、「ぼくと同じだ」「そうそう！」と答える子どもたちが印象的だった。みんなで考えることが当たり前だという雰囲気だからこそ、積極的に発言できるのだと感じた。加藤先生は、たくさん意見がある中で、ねらいに迫るために、場面を大きく2つに分け、板書した。その後、2つの場面に沿って、子どもたちが発言していく。途中で話合いが深まりそうな発言が見られたとき、加藤先生は、新たな発問をすることで子どもたちの考えを揺さぶっていた。それまでは違う考えを発言していた子も、悩んだ様子が見られた。子どもたちの考えを深めるためには、事前に子どもたちの考えを予想し、どんな発問をするのかと、教師自身が見通しをもつことが重要であると改めて分かった。終末には、タブレットを使って自分の考えを記述し、提出した。最後に、本時の内容とSDGsのどの目標と関連があるかを考えて授業が終了した。指導案にもSDGsとの関わりが表記されており、道徳科の授業でもSDGsと関連させることができることを知った。

全体を通して、特に印象に残ったことは子どもたちの発言する姿とその発言を聞く子どもたちの姿である。子どもたちの机上には、教材をコピーした紙一枚のみで、筆記用具も用意していなかった。一人が発言すると、その発言につながるように他の子が発言していく。子どもたちの発言で授業が進んでいる様子を見て、これが議論する道徳なのだろうと感じた。ワークシートに書く必要もなく、子どもたちの言葉で授業を成り立たせる道徳を参観し、このような授業を本校でも行っていきたいと感じた。

(2) 課題別分科会

分科会では、川崎市立はるひ野小学校の公文加菜先生の実践発表を聞いた。多面的・多角的な思考を促すために2つの手立てを紹介していただいた。1つ目は、現在川崎市の学校で取り組んでいる『ユニット学習』というものだった。ユニット学習とは、道徳科の異なる主題を関連させて学習し、他教科や行事とも関連づけながら、道徳的価値を深めていくことだった。公

文先生は、「梨の実（誠実、正直）」「スーパーモンスターカード（善悪の判断、自律、自由と責任）」のユニット学習を行った。「梨の実」で正直に話すことの大切さを考えたあと「スーパーモンスターカード」では、仲のよい友達にも自分の考えをしっかりと伝える大切さや自信をもって正しい判断をすることを考えた。子どもたちは2つの教材から、自分で判断し正直に伝えていくことのよさに気付くことができたとのことだった。異なる主題でも、関連させて考えることで、道徳的価値を深めることができたのだと感じた。他の地域での取組を知るよい機会だった。2つ目は、ICTの活用である。Googleのジャムボードを活用し、意見交流を行っているとのことだった。茨城県でもジャムボードを使っている学校が多いので、以前から様々な教科で使えることは知っていたが、他県でも活用されていることを初めて知った。ジャムボードを使うことで、文章ではなくキーワードを使うので、発言することが苦手な子も授業に参加することができる。公文先生はこのジャムボードを活用することで、自分の考えをもつことができたり、話し合い活動を通して考えを広げたりすることができたとのことだった。道徳科でも、タブレットを活用して自分の考えを深めていくことができると感じた。また、タブレットを一人一台持っていると、そちらに集中してしまい、話し合いが進まないという反省から、グループで話し合いをするときには、タブレットを一つにするようにしていると言っていた。私自身も同じ思いをしたときがあったため、どの地域でもICTに関する悩みや困り感が同じであることを感じることができた。

（3）講演

浅見哲也先生の講演では、全教育活動を通じて行う道徳教育と道徳教育の要となる道徳科の2つの柱に沿って話が進んだ。全教育活動を通じて行う道徳教育は、どんなときでも行われていると明言されていた。例えば、「挨拶がよくできているね。」は礼儀、「メダカの卵が生まれたよ。よく観察しようね。」は自然愛護、「地元でとれた野菜は好きですか？」は伝統と文化の尊重など、教師の声掛け一つ一つに意味があり、毎日の生活から道徳教育をしていることに気付くことができた。また、これらの声掛けは食育にも関連していることを知り、教師の何気ない一言が子どもたちの成長に大きく関わっていることを改めて感じた。道徳教育の要となる道徳科の授業では、教師の価値観の押し付けにならないように注意してほしいと話されていた。例えば、登場人物の心情理解のみに終始する指導、望ましいと分かっていることを言わせたり書かせたりする指導である。私自身の道徳科の授業を振り返ると、子どもたちの考えを正しい価値観へと誘導していると思った。子どもたちが多面的・多角的に考え、議論することができるよう、今後の授業を改善していきたいと思った。さらに授業中の評価について、1時間の中でねらいが達成できたかというよりも、子どもの道徳性に係る成長を長い期間で見取ることが大切だと話されていた。だからこそ、前者の全教育活動を通じて行う道徳教育と合わせて、道徳性を養っていくのだと学ぶことができた。道徳教育で種を蒔き、道徳科の授業で水を与える。道徳教育で発芽し、道徳科の授業で考える。道徳教育で花を咲かせ、道徳科の授業で自己を知る。道徳教育で実を結び、道徳科の授業で種をつくる。この道徳教育と道徳科の循環を繰り返すことで、道徳性を養っていくそう。普段の生活からと授業の中で、子どもたちの道徳性を育むことができるよう努めていきたいと思った。

最後に浅見先生は、教師の役割について話された。教師には、教科担任機能と人間担任機能があり、教科担任機能はアイデアを生かして学ぶことの楽しさを伝えること、人間担任機能は同行教育と背中教育と言っていた。同行教育とは、だれもが互いに「教わり合い、育ち合うという関係」を意味する。背中教育とは、大人の背中を見るだけで安心する『安心感』、大人の背中から生き方を学ぶ『モデル』、大人の背中から滲み出る信頼感に応えようとする『自由の保障』の3つの意味がある。つまり、人間担任機能とは、子どもを一人の人間として尊重し、教師自身の姿で道徳教育を育むとのことだった。この話を聞き、教師は子どもたちの学力を身に付けるだけでなく、子どもたちがこれからをよりよく生きるために教育していくのだと実感した。浅見先生は、道徳教育は子どもたちの未来への投資だと言っていた。教員が子どもたちと関わる時間は、子どもたちの人生の中で僅かなものだが、子どもたちの未来のために、今何ができるかを考え、関わっていきたいと思った。